



地域とともに102年

石巻地域で大正元年に創刊し、102年。株式会社石巻日日新聞社は新聞づくりを通じて、「地域とともに」を胸にその歴史を刻んできた。同社の歴史は1世紀に渡る地域の歴史そのもの。その長い時間、石巻市、東松島市、女川町では多くの喜びと悲しみが生まれ、それらの出来事をペンで書き、カメラに収めてきた。

石巻日日新聞は石巻地域初の日刊紙として創刊。地元の実業家・山川清氏が近代化に向かう時代の波に乗り遅れまいと、住民の意識喚起の必要性を訴え創り出した。初年の題字は「東北日報」。翌年には「石巻日日新聞」と改められ、それ以来100年以上に渡り、この名を守る。同社の歩みを追うことは、石巻地域の歴史はもちろん、新聞自体の歴史

史を振り返ることにもつながる。

大正10年当時は普通版4ページで発行していた同紙。同盟通信の一人として、東京と仙台に支局、周辺郡部には通信員を配置し、中心紙の通信部代行も担った。しかし、昭和15年、一県一紙の新聞統制により廃刊命令が出され、ついには新聞用紙配給を止められるという苦難も経験。終戦を経て、その8年後には有会社社として復刊を果たした後、株式会社となった。

通算紙齢が10000号を達成したのは昭和28年9月。同40年になるといち早く設備の近代化を実施し、全自動印刷機を導入した。同46年、大街道に新社屋を建設するとともに、東北地方で初めて高速オフセット輪転機を採用。株式会社発足30周年にあたる昭和56年の翌年に

は、現在の社屋がある双葉町に場所を移した。

あまり知られてはいないが、昭和60年には石巻駅前にて電光ニュースの放映も行った。現在の購読者からも人気を博している「いしのまきらいふ」を折り込み配布するようになったのもこの時期。平成に入ってもカラー印刷の活用など、常に情報を求める読者のニーズに寄り添っている。

震災を経た、平成24年には石巻地方の歴史や震災の記憶の伝承を目指し、「絆の駅・石巻ニューゼ」を開設した。さらに、震災からちょうど3年となった平成26年3月11日には、「地域と人々をつなぐ」のコンセプトのもと、地域みっちゃんく生活情報誌「んだっちゃん」を創刊。昨年には地域の歩みを追った「石巻の大正昭和・平成」を刊行し、さまざま形態で石巻地域の情報を発信している。

地域を伝えて1世紀 ローカリストとしての使命

株式会社 石巻日日新聞社

石巻地域初の日刊新聞社として創業した

株式会社石巻日日新聞社。

1世紀以上の間、地域を見つめ続けてきた同社が抱く
故郷への想いとは一。



石巻日日新聞社では、社長を含めた社員32人のうち、30代以下が半数以上の18人と意外にも若い。各人が「報道部」「コミュニケーション事業部」「営業部」「編集制作部」「総務部」の5部署のいずれかに所属。互いに支え合い、毎日の新聞を発行している。

記者の使命

「報道部」には現在9人が在籍し、全員が地元の出身者。地元だからこそ地域への想いは大きい。「鏡に映したように書け」「記事は足で書け」「ペンを曲げるな」など、記者の心得を言い表す言葉は多い。

記者ごとに行政や水産、文化など多くの担当がある中で、警察や消防、裁判などを担当するいわゆる、事件記者は女川町出身の横井康彦(27)。平成22年10月に入社し、右も左も分からず地域を駆けまわっていた入社5か月後に震災が起きた。

震災直後はライフラインが寸断され、情報が途切れた。かろうじて見聞きできた情報も被災3県を総括りにしたものばかりで、地域の現状を知る術がなかった。横井は「家族は無事か」「女川はどうなった」というやり場のない気持ちを抱え、市役所や避難所取材した。そこで出会ったのは横井と同じように「まちはどうなってる」と情報を求める避難者たちの姿。情報を届ける。そここそが記者の使命であり、唯一



広告



営業部から編集制作部に広告主のイメージが伝えられる。レイアウトを調整し、作成する。

デスク



記者が執筆した原稿をデスクが目を通して、疑問点を訂正したり、表現を直したりする。

執筆



見聞きした話をもとに、どう書けば読者に伝わりやすいかを考えて文章を書き上げる。

取材



現場に行き、住民や関係者から話を聞く。写真は現場の様子を1枚で表現できるものを撮る。

石巻日日新聞ができるまで

新聞と言うと、記者が取材して、写真を撮って、原稿を書くところまでは分かるけど…。その後はいったいどんな段取りを踏むの？ 普段はなかなか見ることのできない、新聞が生まれる現場を少しだけ覗き見。意外と簡単？ 難しい？ どっち？ (んだっちゃんも同じような工程だよ！)

の存在意義なのだと思った。

「24時間365日記者であれ」。消防車の音が響けば、たとえ深夜だろうが横井は誰よりも早く現場に駆けつける。2月の連続放火事件でも、5か所中4カ所の現場で警察よりも早く到着し、職務質問も受けた。

横井は、常に携帯する警察用電話の着信音を「地域に悲しみが生まれ、た知らせ」と語る。現場にあるのは、血だらけのフロントガラスや膝から崩れ落ちる住民。横井が向かう現場に広がるのは常に悲しみや怒りが渦巻く見たくもない光景だ。しかし、

事件記者として、同じ悲しみが起こらぬよう、問題の原因を探る。「地域の誰よりも悲しみに居合わせている者だからこそ、再発、被害の防止を啓発しなければ」とボーカークフェイスに秘めた想いを話した。

「起こってからでは遅い」。警察・消防関係者が常々漏らす言葉。住民が悲しみに巻き込まれぬように「何度でも現場に向かい、記事にする」と横井。夢は「悲しみの着信がなくなる」とだ。

愛着とつながり

石巻日日新聞社の営業部には「コバルトレー女川」に所属する2人の選手もいる。

チームの守備の要、木内瑛(24)は



入社2年目。広告営業や配達員の代わりの新聞配達などで地域に暮らす人々とのつながりを深めている。

「やっぱり愛着が湧いてきますよね」。爽やかな笑顔でそう語り、今では「サッカーも仕事もどっちもやり切りたい。みんなで一つのものを創り上げることは同じだから」と地域というフィールドを駆ける。

そんな木内が心にかけているのが「相手の話をしっかり聞くこと」。単に広告の掲載を依頼するのではなく、「クライアントにとって必要なことは何なのか、どういうことを伝えたいのかを引き出し、それをいかに反映させるか」を考え抜く。その心には「もっともっと良いものを作って、みんなに読んでもらって、地域が



良くなってくれば」という思い。

配達時に購読者のおばさんに言われた「苦労様。ありがとね」という言葉が今も胸に残る。「やっぱり感謝されるのはうれしいですよ。ちゃんとしたものを届けなきゃって思います」。木内はどこまでもひたむきに、仕事とサッカーに汗を流す。

縁の下で読者想う

記事や広告を紙面にまとめ上げる編集制作部。「読者にとっていかに読みやすい紙面作りができるか」。同部では、常に読者目線に立つ。

2児の母でもある女性社員の一人は、子どもとの時間を大切にしたいと時短で勤務。男性社員が多い中で、職場の理解もあり、周囲からは



「恵まれてるよね」という声も。

石巻日日新聞に子どもが通う幼稚園の記事が載った際には、全園児にプリントして配られることもあり、「みんなが喜んでる様子を見ると、その制作の現場に携わっているのは幸せだなあ」と噛みしめる。

とはいえ、現場は時間との勝負。突発的な変更が発生し、1から作り直す場合には「必死です。時間内に提出するために無心」としつつも、「記者が伝えようと思いを込めて書いた文章が読者に伝わりやすいように丁寧」と妥協はしない。

広報誌や「んだっちゃん」の作成、紙面の印刷など多くの業務がまたがる部署にあって、新入社員の指導も担当する彼女たちは「聞けば何でも教えてくれる。困った時の先輩」と慕う。それでも決して先輩面をしない縁の下の力持ちだ。



震災経てより強く

「手書きの壁新聞」。今では石巻日日新聞の代名詞とも言えるこの言葉。東日本大震災の発災は創刊100年を1年後に控えた年だった。南浜地区からほど近い双葉町にある社屋にも津波が押し寄せた。輪転機が水に浸かり、新聞の発行ができなくなったが、「今、情報届けなくて何が新聞社だと、震災翌日からペンと紙だけしかなくとも、手書きの壁新聞を発行。避難所などに掲示し、このことは後に「ジャーナリストの原点」と評されるようになった。

震災直後は被災住民を思い、購読料を無料にもした。会社には多くの賞賛の声が寄せられたが、同社もまた被災企業。読者である住民の被災により、震災前に1万4千部だった発行部数は、現在8千部にまで数で減らした。

先人の歴史 未来へ

それでも地域の新聞社として、人々に寄り添い続ける決意は変わらない。平成24年の創刊100周年時には、記念事業として「絆の駅」を石巻市中央の旧ホシノボックスシア



「絆の駅」は地域と人を結び集いの場。1階は情報発信拠点の「石巻ニューゼ」、2階は「コミュニティサロン」を担う「レジリエンス・バー」とし、共通テーマはレジリエンス「変化する力」だ。今年3月1日にはイギリスのウィリアム王子も訪問された。

石巻ニューゼでは、同社が1世紀に渡る歴史の中で保存してきた写真や資料を公開。地域の歴史を記した書籍や文献に加え、震災直後の地域の写真や、発災から6日間に渡って避難所などに張り出した手書きの壁新聞の現物を展示し、震災の記憶を伝承している。

絆の駅の館長は、自身も記者とし



て長きにわたり地域を駆け抜けてきた常務の武内宏之(57)。武内は「先人の築いてきた石巻の歴史や文化を未来に引き継ぐ役割を担いたい」と復興に向かう地域の先を見据え、来館者にこの地の歩みを伝える。

人と街をつないで

そして、震災からちょうど3年となった平成26年3月11日には、新たに地域みっちゃんく生活情報誌「んだっちゃん」を創刊した。震災で大きく変わった地域の構図。沿岸部にあった商店が内陸部に移転するなど、「お気に入りのあの店」がどこで再開しているのかわからない人も多



い。今月号で1周年を迎えた「んだっちゃん」は、そんな地域の声を受け、人と店、人とまちをつなぐ「コンセプト」に誕生した。

日々の取材や営業活動中の会話の中で「んだっちゃん」見てるよ」「雑誌の内容が面白い」「うちの子も載ったよ」といった喜びの声を耳にすることも増えた。チーフプレゼンターを担う阿部直人(43)は「次第に人々の心に根付いていく『んだっちゃん』の進む道と地域の目指す道が確かに重なり合っていることに、嬉しさと同時にさらなる使命感を持っていきます」と言葉をつづる。

「んだっちゃん」という石巻弁は



「そうだよね」と同意を求める方言。誌面を通して、「石巻っいいところだよね」と読者に呼びかけ続け、その心の中に「一つでも多く『んだっちゃん』を芽生えさせていく。」

手を取り合いともじ

「我々はジャーナリストであり、それ以前に、地域に根を張るローカリスト」。石巻日日新聞社で変化の先頭に立つ近江弘一社長(56)は、ともに汗を流す社員をそう表現する。

渡波地区で生まれ育ち、ヨットやウインドサーフィンで海とともに育った近江社長。震災ではその実家も無残に流された。「利他の心」で命を懸けて地域のために生きる。石巻日日新聞の皆は僕のその想いに共感してくれる仲間と、若い頃から変わらない地域への想いは一層強くなった。そんな近江社長が見る地

我々はジャーナリストの前に、ローカリスト

日々を読む人

石巻日日新聞の購読者に、紙面でのお気に入りのコーナーや印象に残っている記事などを聞いてみた。夕刊ならではの魅力も♪



購読20年以上

たんの のぶこ 丹野 信子さん (55)

夫(政弘さん)が小中学生の時に石巻日日新聞の配達をしていた縁で愛着が強いことと、土木建設会社(尙)丹野建設を営んでいるので、地元の身近な情報を知るのに重宝しています。長女

はバスケットボール、長男(晃希さん)は野球で何度も新聞に載り、その時は一生懸命探すように紙面に目を通しました。地元ならではの情報が詳しく知ることができるのは魅力です。

み き な 長女 未樹菜さん (23)

求人情報や映画のスケジュールが見やすいのは若い人にとっては大切で、写真もきれいでたくさん載っているのが雑誌感覚で楽しんでいます。やっぱり気になるのは復興のことで、最近

は放火やライオン山の崩落のように物騒なことも多く、地元紙だからこそ深く大きく取り上げてくれて分かりやすいです。何より、集金のおじちゃんがとても陽気で毎回元気をもらっています。

きよかわ しげみ 清川 繁美さん (57)

私は水産関係で働いているので、天気予報と波の高さ、漁業通信が詳しく載っているのが助かります。夕刊である分、その日の情報をその日のうちに読めるのは得した気分。朝はどうしても

時間がなくて流し読みになりがちですが、夕方はゆっくり考えながら読むことができます。写真もきれいで、「20年前のひとこま」では、自分を振り返ることもつながっています。

かずま 長男 和磨さん (25)

記事を書いている記者が地元の人ということで、どんな思いで書いているのかを感じながら読みます。身近な人も載っているのも魅力です。小学校の頃に、他紙には載らなかった空手の

大会の結果で名前が書かれていて、親戚にお小遣いをもらったりもしました。朝刊と違い、夕刊は配達員の方とのつながりが出来るのも石巻日日新聞の良さだと思います。



昨秋から購読

《夕刊 石巻日日新聞 購読申し込み》

☎0120-20-5231 www.hibishinbun.com (石巻日日新聞で検索) パソコン・スマートフォンからも申し込みます。

◆1か月購読料 1,800円 「んだっチャ!」(各戸配布エリア外の場合)とタウン誌「いしのまきらいふ」が毎号ついてきます。

◆6日間お試し購読実施中 ※3月20日から4月30日までの間、上記電話番号まで問合せ下さい。



場に向かい、記事を書く。

地域の未来像は「互いの良い所も悪い所も知った上で手を取り合える地元愛のあるまち」。そのために地元で深く根付いた石巻日日新聞社として「良いことも悪いことも伝えて、読者に考えてもらうこと」で、一緒に良い地域を作り上げていきたいと地域の情報を扱う責任を語った。